

街を行く

第107回 中央大学・明星大学 Chuo University - Meisei University

キャンパス直結の便利性

今回はいつもとは少し趣向を変え、大学街をみてきました。

東京には、学生街（高田馬場、お茶の水、水道橋）や学園都市（町田、世田谷）など、大学をはじめとした教育機関を核に街が形成されているエリアがあります。そして、ここ多摩モノレール線「中央大学・明星大学」駅は、大学“そのもの”が街を形成しています。

中央大学が御茶ノ水からこの地へ拠点を移し巨大なキャンパスを構えたのは40数年前（ちなみに小生が学生生活を始めた頃）のこと。恥ずかしながら訪れたのははじめてで、八王子キャンパスだから「最寄り」はJR八王子駅だろう」と思い込んでいました。実際はJR中央線「立川」駅を下車して、多摩モノレール線（開業20周年だそうです）「立川南」駅に乗り換えるというのが一般的な通学コースなのだそうです。当然、多摩モノレールも初体験です。途中、映画やテレビ時代劇でお馴染みの新選組の副長土方歳三生誕地がある「万願寺」駅や、むかしテレビのワイドショーによく登場していた園長先生がいる「多摩動物公園」駅がありました。それらを過ぎると、いよいよ当該駅です。着いて、まず驚いたのは中央大学、明星大学それぞれの校舎が線路を挟み、左右にそびえ立っている光景です。大学のキャンパスは通常「駅を降りてから徒歩で何分」の場所にあるところ、ここは駅直結です。さながら駅前再開発のホテルやオフィスビル、商業施設といった風情です。ちなみに、少し先の駅には「大塚・帝京大学」がありますが、キャンパスは直結していません。駅の配置



駅の左右にそびえる中央大学と明星大学の校舎、学ぶ目的を満たす環境、機能、アクセスは良好だが、街としてはどうか。考えさせられる。

形状をみると、中央大学の敷地に合わせてつくられたものと想像されます。一方明星大学は、駅前立地にキャンパスを開発したようにみえました。乗降客のほとんどは学生か大学関係者でしょう。

いま大学や専門学校は、海外留学生の受け入れやサービス向上など学生獲得に必死です。それでも、少子高齢化・人口減少が言われるなか、遅かれ早かれ、現実的な淘汰の時代がやって来るでしょう。街づくりをする側には学園という機能は地域の活性化に重要ですが、学生にはアクセスのよさが大事。それは駅からのアクセスだけでなく都心部からのアクセスを重視しています。かつて、勉強に最適な落ち着いた環境、広大なキャンパスを求めて郊外に移転した大学群が、刺激的で知的好奇心を満たし、人と人との交流がしやすい都心に回帰しつつあります。

そして、大学街で安定的な学生需要を当て込んで建てられてきたアパートやマンションは、この先借りる人が少なくなるでしょう。少子高齢化の問題は大学経営だけではなく、街づくりや再開発計画にも大きな影響を与えています。利便性に加え、ユニークな特徴、独自性をもった街が今後、どのように生まれ、生き残っていくのか、目が離せません。

南 一 弘



1982年大学卒業後、三井不動産販売に入社。ローンスター・ジャパン・アクイジションズを経て、2001年エートス・ジャパン・エルエルシーを設立。同代表に就任。2005年4月MID都市開発（旧松下興産）の代表取締役役に就任。2006年ジャパン・アセット・アドバイザーズを設立。同代表取締役役に就任。